

〔共済連だより〕

家畜診療日誌

生産獣医療支援センター 吉村 遥子

牛相手の診療といえば、“経験的で大胆な治療”と良くも悪くも言われますが、実際に今年の4月よりNOSAI岡山に就職し、大動物の治療に接して感じたことは、まったく逆のことでした。

手術では、お腹、さらには胃を切られているにも関わらず、牛は平気で立っていますし、手術後すぐに歩いて自分の牛床へと帰って行きます。人間の手術では術前の手洗いに10分も15分も時間を要し、きちんと換気された手術室で行われるのに比べ、牛においては滅菌された環境で手術をすることは非常に難しい状態です。

そして搾乳牛は、自分の体重の1/10ほどのお乳を毎日作り出すという過酷な生産活動に耐える強さを持っています。

その一方で、頸部をアル綿で拭こうとしただけで、注射を嫌がって暴れまくる臆病な牛もいます。また、飼養者が変わって餌の寄せ方が少し変化しただけでも調子が悪くなるという繊細さも持ち合わせているようです。

そして、獣医師の先生たちの診療も、一見大胆にみえることも少なくありませんが、実際は非常に繊細で丁寧であることを日々感じます。

現在私は、先輩獣医師の往診車に毎日同乗させてもらい、農家を回って診療等を勉強中です。診療帰りの車内で、その日みた牛の状態について質問すると、「何でそんなことまで分かるの？」と思うことばかりで、ほんの短い時間で牛の状態を把握していることにいつも驚かされます。

たとえば、子牛が下痢をしていた場合、私にはまったく同じ下痢にしかみえなくても、先輩獣医師には原因が細菌性なのか消化不良性によるもの

のか二次的に生じたものなのか見当がついていることや、出生直後の子牛をちらっと見ただけで、難産であったかどうか判る、などです。先輩獣医師のほんの一瞬の動作には、牛の状態を理解するための秘密がたくさん隠されているようです。牛の体の外側から五感を使って得られた情報を、今まで得たあらゆる側面からの経験や文献と照らし合わせ、マクロからミクロの牛の世界を理解していく先生たちの奥の深さを感じる毎日です。

牛は、注射される時は頭を振って嫌がり、人が後ろに立ったときはなんだろうと振り返り、餌を出されれば喜んで食べ、何か大きな音がすれば驚いて振り向く、仲間の一頭が治療されているときは、何かとみんなで心配そうに見守るなど、単純な行動をとっているようにも思われます。しかし、今どこが一番辛いのか、いつ頃から体調が悪いか、原因として思い当たることはないか、どうして欲しいかなど、獣医師として知りたいことを、牛は言葉にして教えてはくれませんが、伝えたくても伝えられません。だからこそ、牛のちょっとしたsignに的確に気付くことが出来るような、繊細な感覚を身に付けることが必要なのだと感じます。

“阿吽の呼吸”と云いますが、この「吽」の元の意味は「牛が鳴く」だそうです。牛の心の鳴き声は人間の言葉へ変換できませんが、だからこそ、牛と「あ、うん」の呼吸で意思疎通をし、経験と根拠に基づいた適切な治療ができるようになりたいと思っています。